**おおさかＱネット「恩智川流域府民の河川に対する意識と行動」の**

**アンケート 分析結果概要**

* 実施日　　平成２８年１０月２１日（金）
* サンプル数　　恩智川流域（柏原市、八尾市、東大阪市、大東市）に在住の府民1,037人



* 分析結果概要
1. 調査目的

大阪府域には数多くの河川があり、府においても、様々な美化活動に取組んでいる。恩智川は平成25年度以降、流域市（柏原市・八尾市・東大阪市・大東市）と流域府民、関係団体等が連携して河川の美化・啓発活動を推進しているが、流域によってごみの浮遊量が多い流域があるなど、課題は多い。本調査において、流域府民の恩智川をはじめとする河川やまちに対する意識や行動を把握し、今後それらの美化に向けた効果的な広報・啓発手法の検討に活かす。

1. 調査仮説

仮説１　性年代、物理的距離、普段の関り方や認識等によって恩智川の美化活動への積極性に差がある

仮説２　住んでいる河川流域（上流・下流）によって、恩智川の変化の感じ方に差がある

1. 主な調査結果

仮説１

①美化活動実施の認知度

【性年代別】70代の男性で、他の性年代に比べて高かった。

【関り方別】恩智川との距離が近くなるほど、接する頻度が多いほど高かった

【認識別】親水派・機能派が否定派※に比べ高かった。※本文参照

②美化活動への参加率

【性年代別】若い年代での参加率が高い傾向にあった（但しサンプル数が少数のため参考値）

【関り方別】恩智川との距離が近くなるほど、接する頻度が多いほど高かったが、統計的に有意といえる差は確認できなかった。

【認識別】親水派・機能派が否定派に比べ高かったが、サンプル数が少数のため参考値

③美化活動の情報提供（活動を「知らなかった」人のうち、情報がほしいと思う人の割合）

【性年代別】60代の男性が最も高く、50代の女性が最も低かったが、統計的に有意といえる差は確認できなかった。

【関り方別】恩智川との距離が近くなるほど、接する頻度が多いほど高かった。

【認識別】親水派が最も高く、必要層が不要層を上回った。

普段から恩智川により接している人ほど、また、河川の存在について、親しみやすさや機能面を重視する人ほど、美化活動への積極性がみられた。

仮説２

回答者の居住地（4市）で比較したが、突出して変化を実感している市はなかった。

　　最上流域市（柏原市）、最下流域市の２市のみで比較した結果、「水がきれいになった」の項目で、柏原市の方が実感している人が多かった。

（注）

1. 「おおさかＱネット」の回答者は、民間調査会社のインターネットユーザーであり、回答者の構成は無作為抽出サンプルのように「府民全体の縮図」ではない。そのため、アンケート調査の「単純集計（参考）」は、無作為抽出による世論調査のように「調査時点での府民全体の状況」を示すものではなく、あくまで本アンケートの回答者の回答状況にとどまる。

ただし、性別、年齢、地域に関しては、直近の国勢調査結果の大阪府の構成比に合わせている。

1. 割合を百分率で表示する場合は、小数第2位を四捨五入した。四捨五入の結果、個々の比率の合計と全体を示す数値とが一致しないことがある。
2. 図表中の表記の語句は、短縮・簡略化している場合がある。
3. 図表中の上段の数値は人数（Ｎ）、下段の数値は割合（％）を示す。
4. 図表下に記載のカイ２乗検定の値（ｐ値）は、5%水準により判断している。つまりｐ値が5%未満の場合、統計上の有意差があるとみなす。
5. 複数回答のクロス集計については、カイ２乗検定を行っていない。

**１　恩智川美化活動に関する関心（仮説１）**

**１－１　恩智川美化活動の認知度**

**（１）全体結果**

Ｑ11で、恩智川を中心とするまちの美化意識の向上や清掃のためのボランティア活動（以下「美化活動」が行われていることについての認知について質問した。

その結果、「知らない」と回答した人が８割以上となった（図表１－１）。

* **知っている　→　１３．６％**
* **知らない　→　８６．４％**

**【図表１-１】**





**（２）属性別検証結果**

**■性年代別**

次に、男女別、年代別で美化活動についての認知度を比較した。

その結果、男性の方がやや高かったものの、統計的に有意といえる差は確認できなかった（図表１－２）。

また、性年代別では、女性30歳未満と男性70代以上で他の性年代カテゴリに比べ高い割合となった（図表１－３）。ただし、女性30歳未満では、統計的に有意といえる程の差はなかった。

* **男性　→　１４．８％**
* **女性　→　１２．４％**
* **女性30歳未満　→　１９．６％**
* **男性70代以上　→　３１．１％**

**【図表１－２】**







**【図表１－３】**





**■恩智川との距離・頻度別**

**次に、回答者の生活圏と恩智川との距離及び恩智川に訪れる頻度別の認知度を比較した。**

分析にあたっては、距離についてはＱ９、頻度については、Ｑ10で質問した結果について、それぞれ「わからない」を省いたうえでクロス集計した（図表１－４）。

* **恩智川に近くなるほど認知度が高くなり、また接する回数が多いほど認知度が高かった**

**【図表１－４】**







**■河川や河川周辺の空間に対する認識別**

Ｑ20では、生活における河川等の存在について質問した。分析にあたっては、「憩いの場」「子どもの（子どもと過ごす）遊び場」「地域の人の交流の場」「散策やランニングなどスポーツを楽しむ場」と回答した人を【親水派】、「景観をよくするもの」「自然環境の保全に寄与するもの」「防災機能の向上に寄与するもの」と回答した人を【機能派】、「危険な場所」「不衛生な場所」と回答した人を【否定派】とカテゴリした。なお、「その他」「特に何もない・わからない」省いて集計した（図表１－５）。

* **【親水派】・【機能派】が【否定派】に比べ認知度が高かった。**

**【図表１－５】**





**１－２　恩智川美化活動のへの参加**

Ｑ11で美化活動が行われていることを「知っている」と回答した人に対し、参加の有無を質問した。

**（１）全体結果**

知っている141人のうち、26人（18.4％）が参加したことがあると回答した（図表１－６）。

* **参加したことがある　→　１８．４％**

**【図表１-６】**







**（２）属性別検証結果**

**■性年代別**

次に、男女別、年代別で美化活動についての参加率を比較した。

その結果、女性の方がやや高かったものの、統計的に有意といえる差は確認できなかった。

また、サンプル数が少ないため検定は行わないが、男女とも年代が若い方が参加率が高かった（図表１－７）。

* **男性　→　１７．１％**
* **女性　→　２０．０％**

**【図表１‐７】**







**■恩智川との距離・頻度別**

　次に、回答者の生活圏と恩智川との距離及び恩智川に訪れる頻度別の美化活動への参加率を比較した。

* **恩智川に近くなるほど、また接する頻度が多いほど、参加率は高かったが、統計的に有意といえる程の差は確認できなかった（図表１－８）。**

**【図表１－８】**







**■河川や河川周辺の空間に対する認識別**

【親水派】・【機能派】が【否定派】に比べ高かったが、【否定派】の参加者サンプル数が少ないため参考値。なお、【親水派】・【機能派】で5ポイント程度差があったが、統計的な有意差は確認できなかった（図表１－９）。

【図表１－９】





**■居住地（上・下流域）と恩智川との距離**

次に、美化活動へ参加したことのある人の居住地と恩智川との距離との関係を比較した。※

（※ここでは、参加者のサンプル数が少ないため、検定は行わず、参考値。）

なお、比較しやすいように、Ｑ９で「400ｍ以内」または「1Ｋｍ以内」と回答した人を【近い】、「１Ｋｍ以上」と回答した人を【遠い】とし、この2分類でカテゴリした。

居住地4市別でみると、下流域の市に住む人ほど参加率が高かった。これをさらに、恩智川との距離で分類してみると、どの市も近い人の方の参加率が高くなっていることがわかる。





**１－３　恩智川美化活動の情報提供**

Ｑ11で美化活動が行われていることを「知らない」と回答した人に対し、恩智川の美化活動の情報がほしいかどうかを質問した。集計にあたっては、「ほしい」「どちらかというとほしい」を【必要層】、「どちらかというとほしくない」「ほしくない」を【不要層】としてカテゴリした。また、「どちらともいえない」と「わからない」は除いた。

**（１）全体結果（図表１－10）**

* **必要層　→　３０．４％**
* **不要層　→　６９．６％**

**【図表１‐10】**







**（２）属性別検証結果**

**■性年代別**

次に、男女別、年代別で美化活動の情報提供について比較した。

その結果、【必要層】については、男性の方がやや高く、性年代別では男性60代が最も高く、女性50代が最も低かった。ただし、いずれも統計的に有意といえる差は確認できなかった（図表１－11）。

* **男性　→　３１．４％**
* **女性　→　２９．３％**
* **男性60代　→　４１．７％**
* **女性50代　→　１９．５％**

**【図表１－11】**









**■恩智川との距離・頻度別**

　次に、回答者の生活圏と恩智川との距離及び恩智川に訪れる頻度別の美化活動の情報提供について比較した。

* **恩智川に近くなるほど、また接する頻度が多いほど、【必要層】の割合は高かった（図表１－12）。**

**【図表１－12】**







■**河川や河川周辺の空間に対する認識別**

* **【機能派】が最も必要層の割合が高く、不要層を上回った（図表１－13）。**

**【図表１‐13】**





**２　恩智川の変化についての実感**

Ｑ１で、「恩智川」の様子について知っていると回答した人に対して、恩智川の変化について実感しているかを質問した。なお、集計にあたっては、「そう思う」「ややそう思う」を【実感層】、「変わらない」「あまりそう思わない」「そう思わない」を【非実感層】とカテゴリし、「わからない」を除いて集計した。

回答者の居住地（柏原市、八尾市、東大阪市、大東市）とクロスした結果、突出した結果の市域はなかった。

そのため、最上流域市（柏原市）と、最下流域市（大東市）を抜き出して比較した。

その結果、「水がきれいになった」の項目について、柏原市の方が大東市より14.5ポイント高く、統計的な有意差が確認できた（図表２－１～２－６）。

**【図表２－１】**







**【図表２－２】**







**【図表２－３】**







**【図表２－４】**







**【図表２－５】**







**【図表２－６】**







美化活動への積極性（認知度、参加率及び情報提供希望）については、高齢者では、認知度や情報提供の希望に比べ、参加率が若干低いことなどから、体力的な不安要素があることが推測される。

また、恩智川との関り方では距離的に近い人や、恩智川と接する機会が多い人ほど、積極性の高さが見られた。一方で、河川に対する認識では、【親水派】や【機能派】というカテゴリをしたように、河川を生活の一部（機能）として身近に感じている人ほど、それ以外の人と比べ積極性が高い傾向にあった。日常的に河川を目にしなくても、河川と生活との関係性を知る機会等の充実など、少しでも河川を身近に感じることにつながる取組みや、それぞれの年代にあった関り方を啓発、提案をしていくことで、河川に対する関心を高めることにつながることが期待できる。

　また、これまで、恩智川の美化活動を実施してきたが、今回の調査では「変化の実感」については「変わらない」と回答した人がもっとも多く、変化をより多く実感している市域も確認できなかった。ただし、4市での実感層の比較では、上流域の市から順に下がる傾向にあり、これは美化清掃活動を実施しても、構造上下流域によりゴミが停留するため清掃効果を感じづらいことが原因の１つと考えられる。

　身近に河川を感じている人はコアターゲットとしながらも、年代や生活圏に関らず、より多くの流域府民が美化活動の重要性や現状を認識できるよう広く情報提供や啓発をしていくことが、参加者の増加につながると考える。